

キュウリ ミナミキイロアザミウマについて



図1 成虫（体長約1.3 mm）



図2 群生するミナミキイロアザミウマ



図3 キュウリ葉表の食害痕



図4 キュウリ果実のシルバリング



図5 MYSVに感染したキュウリ

1 生態

ミナミキイロアザミウマ（以下ミナミキイロ）の雌成虫は体長約1.3 mm、雄成虫はそれよりやや小さい。体色は雌雄ともに黄色で、背中にはたたまれた翅が黒く筋状にみられる。

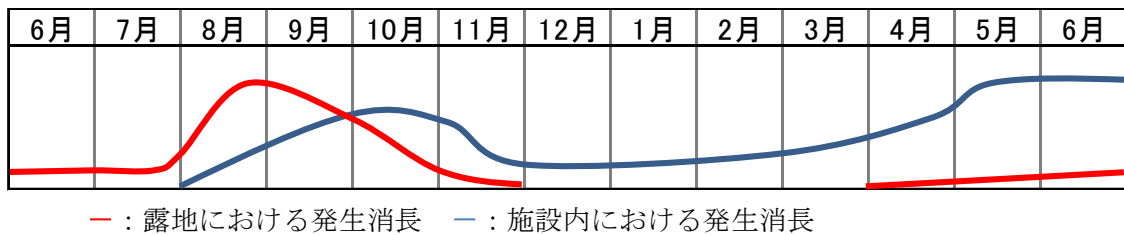
本虫は単為生殖および有性生殖を行う。卵は植物の葉や茎などの組織内に産み付けられ、ふ化幼虫は2齢を経て、前蛹となり土中などで蛹化し成虫となる。発育速度は温度により異なり、25℃条件下では卵から成虫となるまで、およそ2週間である。温度が低いとその期間は長くなり、高いと短くなる。なお、発育零点は約12℃であり、35℃以上の高温となると発育の遅延や停止がみられる。成虫は25℃では約30日生存し、その間におよそ100卵を産下する。

本虫はメロン黄化えそウイルス（MYSV）を媒介するため、キュウリ、メロンでは特に重要な害虫である。

2 発生状況

本虫は東南アジア原産であり、露地では越冬できないが、施設内などでは越冬が可能である。休眠性がないため、冬期においても施設内では増殖する。春期になると、露地作物や雑草に移動し世代を繰り返し、施設栽培が始まると再び施設へ侵入する。

本虫はキュウリ・メロンをはじめ、ナスやピーマンなどの野菜のほか、果樹や花き等、多くの植物に寄生する。被害部位は寄主植物により異なるが、おもに葉、茎、果実を加害する。幼虫は葉裏の葉脈沿いや果実のへた付近に群生し、集団で加害することが多く、葉表では白いカスリ状、葉裏では銀白色の食害痕がみられる。



3 防除対策

(1) 薬剤による防除

薬剤抵抗性の発達を避けるため、同一系統薬剤の連用を避ける。また、苗からの持ち込みを防ぐため、育苗時も薬剤により防除を徹底し、定植時には粒剤を施用する。

(2) 侵入防止対策

施設栽培では、開口部への0.4mm目合い防虫ネット、赤色防虫ネットの設置、紫外線除去フィルムの展張やシルバーマルチを設置し、外部からの侵入を防ぐ。

(3) 蒸し込み

施設栽培では、栽培終了後に施設の密閉（蒸し込み）処理を行い、ミナミキイロを死滅させるとともに施設外への離脱を防ぐ。なお、施設内に雑草等が残存していると雑草上で生存するため、必ず除草してから密閉処理を行う。

(4) 栽培管理

芽かきや摘葉などの残渣にミナミキイロが寄生していることがあるため、ほ場内に放置せず、ほ場外に持ち出し、適正に処分する。

(5) 除草の徹底

ほ場内および周辺の雑草は生息源となるため、除去する。

(6) その他

メロン黄化えそウイルス（MYSV）を媒介するため、低密度であっても保毒虫が存在していると本病に感染し、大きな被害が発生するため、メロンやキュウリでは上記の防除対策を徹底する。